

## 高等学校生徒による方言教材作成—〈篠山弁〉を事例として—

藤本真理子<sup>1</sup>・西本智子<sup>2</sup>

### 1 はじめに

本発表は、2015年に兵庫県立篠山鳳鳴高等学校で行われた地域伝統文化研究を、小・中・高・大学等の教育機関における方言教育の取り組みの一つとして紹介することを目的とする。この教育活動の取り組みの具体的な成果として、2015年11月に「ふるさと篠山のことば」(平成27年度 第二学年総合的な学習の時間 地域伝統文化研究2～篠山弁入門～)が作成された。発表者は、本活動を実施した高等学校教諭と、本活動を通じて方言教育が地域伝統文化研究へ取り入れられる過程を観察した言語学研究者とで行う。

本発表では、次の2つにわけて、この取り組みの成果を述べる。

1つめは、実施された方言教育の教育活動的側面である。(1)活動実施の経緯(前年までの取り組みや地域との関連性など)、(2)授業実施前の準備、(3)授業の設定(目標・時間数など)、(4)実施された授業観察(生徒の反応など)、(5)成果のフィードバック(生徒、教員、地域など)を報告する。

2つめは、方言教育の成果物に対する言語学的な側面である。今回の授業で作成した資料「ふるさと篠山のことば」を例に、教育機関における方言教育の取り組みの成果物を、どのような方言資料として見ることができるかを検討する。

### 2 背景および対象の概要

#### 2.1 篠山市および篠山方言について

兵庫県の中東部に位置する篠山市は、1999(平成11)年に多紀郡の篠山町、今田町、丹南町、西紀町の4町が合併してできた、広さ377.61km<sup>2</sup>、人口4万1490人(2015年)の市である。北から東は京都府、東南部は大阪府と接しており、古くは丹波国にあたり、城下町として栄えてきた町である。近年は、伝統工芸(丹波焼)や農作物、デカンショ祭など様々な資源をもとに、観光業にも力を入れている<sup>3</sup>。



篠山市はJR福知山線の沿線区域として京都、大阪の通勤・通学圏内にあることから、当該地域の方言はアクセント、語彙、文法など、その多くが関西の京阪方言と重なる。また地理的には播州とも近く、いわゆる播州弁の語彙も多く用いられている。その他の方言的特

<sup>1</sup> ふじもと まりこ(尾道市立大学)

<sup>2</sup> にしもと さとこ(兵庫県立篠山鳳鳴高等学校)

<sup>3</sup> 平成27年に「丹波篠山 デカンショ節—民謡に乗せて歌い継ぐふるさとの記憶」として日本遺産に認定された。

徴としては、テヤ敬語や、ザ行音とダ行音の混同が観察されている。今回、取り上げる方言教育を实践した機関は、兵庫県篠山市（旧篠山町）にある高等学校である。

## 2. 2 成果物について

分析対象の「ふるさと篠山のことば」の概要は以下のとおりである。この資料は、篠山鳳鳴高等学校の第2学年（約180名）が総合的な学習の時間をはじめ、1年次、2年次の地域伝統文化研究を通して学んだ内容を踏まえたものである。2015（平成27）年11月18日発行、B5版白黒、全80頁、〈クロスワードパズル〉34個と〈篠山弁教科書〉10課という2部構成である。生徒たちは、篠山方言の学習教材をイメージしてこれらを作成しており、この作成を通じて、篠山方言を見つめ、その仕組みを考えた。〈クロスワードパズル〉では、篠山市の地域方言を特徴づける単語が中心に取り上げられている。〈篠山弁教科書〉は『出雲弁検定教科書』（ワンライン、2008年）や中学英語の教科書などを参考にして作成され、勧誘や疑問などを盛り込んだ会話を中心とした教科書になっている。各課には、会話、語句の解説、基本文、基本練習などが用意されている。

第1課	お正月の準備	第2課	お正月の朝ごはん
第3課	夏休みに友達と出会う	第4課	デカンショ祭に行こう!!
第5課	畑でご近所さんと話す	第6課	じげのひやく
第7課	スマートフォンの使い方	第8課	今日の晩ご飯は？
第9課	雪だるま作ろう！ 篠山弁 ver.		
第10課	ONE PIECE メリー号との別れ		

## 3 方言教育の教育活動的側面

本活動を実践した高校では、第1学年の生徒全員を対象として、自らが学び生活する丹波篠山について研究する「地域研究」の時間を設定しており、数十年間継続している。平成26・27年度の2年間は、伝統文化教育の研究指定を受け、第2学年においてもことばの観点から地域研究を行うこととした。

本発表で取り上げる平成27年度の研究に先立って、平成26年度から篠山の方言研究を開始した。まず第2学年の生徒全員が地元商工会会長から地域のことばについて講義を受けた。また、地元出身の教諭が計4回「篠山弁新聞」を発行し、方言に対する興味関心を喚起した。次に、班別にくじで決定したシチュエーションについて寸劇を考え、クラスで披露し合った。

平成27年度は、前年度の取り組みに探究的視点を加えて、篠山弁や篠山にまつわる単語を材料とする〈クロスワードパズル〉と、篠山弁会話を創作し、単語や文法について注釈を加える〈教科書〉作成を行うこととした。前年同様篠山方言についての講義の後、教員が制作したクロスワードパズルと教科書の例を生徒に提示した。また、もう一つの参考資料と

して、過去に篠山方言話者により制作された語彙リストを配布した。班での作業時には、講師として招聘した地元住民をクラスに一名ずつ配置し、生徒の質問に対応した。各班の作品を分析すると、参考資料に大きく影響を受けていることが明らかである一方、ことばを一度自らの中に取り込み、よく内省したうえで取り出していることが見て取れる。全作品を冊子「ふるさと篠山のことば」としてまとめ、優秀作品は、制作した班が、クロスワードパズルについては制作意図を説明し、教科書については篠山弁ミニ講義を行い、学年全体で成果を共有した。活動の成果として、家庭での家族の発言に思いをいたしたり、気になる表現について祖父母に尋ねたりする生徒もあらわれた。最後に、方言を研究対象とする大学教員から講義を受け、自分たちの取り組みを方言研究として位置づけ、大学での研究の出発点についても意識することができた。

平成 28 年度は、1 年生の地域研究のテーマの一つとして方言研究を継続している。

#### 4 方言教育の成果物に対する言語学的な側面

##### 4. 1 成果物に見える方言形式

資料には、篠山方言としての伝統的形式と非伝統的形式のいずれも見られ、若年層の方言意識をうかがうことができる。以下の①②は資料にもとづき発表者が分類した。

###### ① “篠山弁”として強く認識されていると思われることば

…文末の「～じょ／～じえ」、ザ行音とダ行音の混同「おどうに（お雑煮）」

###### ② あたかも“篠山弁”かのように認識されていると思われることば

…「～さかい：～から」「そない：そんな～」／「じぶん：時代・時期。」「どっか：どこか」教科書編の〈語句の解説〉からは、当該地域の若年層が思い描く“篠山弁”は核となる①とその周辺部にある②とで構成されていることが読み取れる。①は篠山方言の中でも伝統的形式にあたり、方言として意識されやすい文末助詞や音変化である。これらは現在、若年層話者の使用実態はほとんどないという報告を受けている。②は、いかにも地元のことば“篠山弁”かのように捉えられているが、篠山のみに限られた形式ではなく、広く関西方言にふくまれるものが多い。特に方言を取り出す作業の性質上、作成した若年層にとって理解はするが使用はしない語彙を取り出す傾向が見られる。

##### 4. 2 文末の「～じょ／～じえ」<sup>4</sup>

文末の助詞「～じょ／～じえ」は、本資料では次のように用いられている。

###### (1) (食卓でこぼした息子を非難する場面にて)

母「あんた何しとってんじえ」                      〈訳〉あんた何してるの      (第2課)

<sup>4</sup> 藤原与一『方言文末詞〈文末助詞〉の研究(中)』(春陽堂書店、1985年)では、「ジョ」については「ジャ+ヨ」「デヨ」、「ジェ」については「ゼ」に相当するものがあることが指摘されている。いずれも当該地域に関する指摘ではないものの、「ジョ」が男性に主に使用されるぞんざいな表現であるといった類似点が見いだされる形式も報告されている。

(2) 田中さん：あんたなにしょんじょ。 〈訳〉あなたは何をしていますのですか。

佐藤さん：野菜を見に来たんじえ。 〈訳〉野菜を見に来たんです。 (第5課)

親子間、友人間、隣人間の会話を想定して作成された課の内容では、若年層が接する地域方言をある程度再現できていると考えられる。「～じょ／～じえ」は、教科書編の複数の課にまたがって取り上げられている。特に「～じえ」は第2・3・5課(〈語句の解説〉あり)、第4・6・7・8課(本文のみ)の計7課に現れる。本資料に見られる会話文中の「～じょ／～じえ」は表1のとおりである。ただし、若年層はこの文末助詞をほとんど使用していないため、3節で示した事前指導の影響を受けていることが推測できる。

表1 〈篠山弁教科書〉に見られる「～じょ／～じえ」

会話文総数	じょ(んじょ)【疑問】	じえ(んじえ)【疑問】
146	15 (6) 【8(6)】	18 (12) 【7(6)】

この形式に標準語訳をあてる際には次のような方言意識が見られた。近所の人どうしが話す場面に出てくる標準語訳は、丁寧体が用いられたり用いられなかったりする<sup>5</sup>。

(3) Tさん：きょうびの子はホンマに電話ばかりじえ。

〈訳〉最近の子は本当に携帯いじってばっかだね。

Mさん：だりしゃん いのかし方 教えてくれんかいな。

〈訳〉誰か使い方教えてくれないかな。 (第7課)

(4) Bさん：なんで、はげとんじょ。 〈訳〉どうして(手袋を)はめているのですか。

Aさん：それがやの、穴掘ってそのこの下にいけたお金をとりにいくんじえ。

〈訳〉それがですね、穴を掘って床下に埋めたお金をとりにいくんです。

Bさん：えらいこっちゃやがな。 〈訳〉とても大変ですね。 (第6課)

これは若年層の間で「～じょ／～じえ」の待遇上の位置づけにゆれが見られることを意味する。また全体を通して、当該地域の若年層がコードスイッチングをどのように行うかを知る手がかりになるとも考えられる。その他、文末の「～じょ」が実態から離れ、役割語またはキャラ助詞のように用いられている例も資料には確認できる。

(5) メリー：すまんのう／もっとみんなを遠うまで運んであげたかったじょ／すまんのう  
づっと一緒に冒険したかったじょ

ルフィ：すまんゆーんは、わしらの方やわいなメリー／わし、かちとるの下手やからのう。お前を冰山(ひょうだん)にぶついたりしたりのう。帆も破ったことあるしのう。(略) (第10課)

以上のように、本資料からは当該地域に住む若年層がどのような要素をその地域の方言として捉え、どのように解釈しているかを把握することができる。

<sup>5</sup> 教科書を作成するという意識が、丁寧体の使用を促した可能性もある。